「ともしび」での実習風景

●●Interview●●

小さな画面の大きな世界
「紙芝居」の魅力を広めたい

7/15「第49回久留島武彦文化賞」を受賞

紙芝居研究家・実演者　加藤　武郎さん

小平紙芝居サークル「ともしび」の例会で、紙芝居の実演を見せてもらった。例会では実演後、会員同士で演じ方について批評し教えあう。小さな画面に広がる世界、演じ手の声色ひとつ、間の取り方ひとつ、画面の引き抜き方ひとつで絵が活きてくる。紙芝居ってこんなに奥が深いものだったのかと認識を新たにした。

サークルを指導する加藤武郎さん（70）。紙芝居専門（当時）の出版社「童心社」に入社した1961年から今まで紙芝居一筋だった。

自分たち出版社と作家や画家が一生懸命作った紙芝居を、練習もせずぶっつけ本番で、ト書きまで読んでしまうようなひどい演じ方をされている現場を目にして、これではダメだと思った。「紙芝居は日本独自の文化財。文化としての、芸術としての紙芝居を育て普及していきたい」と熱く語る加藤さん。

いわゆる〝教育紙芝居〟を復興させたい。最近、商売としての街頭紙芝居が復活しつつあるというが、加藤さんはこれには首を傾げる。演じ手が目立ったり、ドンチャカパフォーマンスをやったり、ましてや飴やせんべいを売るためだったり、紙芝居をオモチャ扱い商売の小道具にされることを危惧する。

「作家と、作家のねらいや願いをわかる演じ手と、観客、この3つが揃って、初めて紙芝居の共感の世界が完成するんですよ」

「良質な紙芝居は、何枚かの絵とセリフが極度に圧縮されて完成している。それが観客と演じ手とが互いの息づかいを感じられる場の中で、わずか10分か15分で共感の世界を創造できる。質の高い紙芝居を目指していきたいです」。

童心社退職後の10年も紙芝居一筋。講演と実演活動を続けてきた。その受講者が自らも紙芝居をしてみたいと、加藤さんの指導のもと、サークルを立ち上げた。小平の「ともしび」、東村山の「原っぱ」、東久留米の「いずみ」、町田や茅ヶ崎にも、今やベトナムやヨーロッパにもその輪は広がっている。

このような功績に対して、青少年文化の向上と普及に貢献した人に贈られる第49回久留島武彦文化賞を去る7月15日に受賞。このことは加藤さん自身だけではなく、紙芝居サークルのみなさんの大きな喜びと励みになった。

今年7周年を迎えた小平「ともしび」では、10月31日秋の祭典を企画し練習中。また、保育園、学校、児童館、学童、高齢者デイサービスなどへのボランティア出前公演の回数は年々増えて今では年間290回余、のべ観客数も年間7千名を超えている。

東村山「原っぱ」では、学校の授業で紙芝居をしてほしいという依頼があって、清瀬高校の修学旅行を控えた2年生に平和教育として「嘉代子ざくら」「平和のちかい―『原爆の子』より」などを見せた。東村山の中学校でも全校をあげて〝いのち〟をテーマに紙芝居で学習をした。テレビや映像世界に慣れ親しんでいる子どもたちに、紙芝居は新鮮でもあり、心を惹きつけられているのが実感されたという。

東久留米「いずみ」は、市や図書館の行事の他に施設への出前でも頑張っている。

いくつものサークルの指導に、講演にと飛び回っている加藤さん、紙芝居の魅力を多くの人に知ってもらいたいと益々思う。

加藤武郎（かとうたけろう）　小平市花小金井在住
秋田県出身　子どもの文化研究所所員・紙芝居文化推進協議会会員・紙芝居文化の会会員